
千雨の夢

メル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千雨の夢

【Zマーク】

Z0988BA

【作者名】

メール

【あらすじ】

果たして夢を見ているのか、今までが夢だったのか・・・
千雨魔改造ものです

夢の始まり

「長谷川さん。長谷川さん！」

この良く出来た夢は、一見なんてことはない、良く晴れた春の教室の一室から唐突に始まった。

「・・・んあ？」

名前を呼ばれて顔を上げれば、教壇の上から女の先生が教科書と教鞭を持ってこちらを見つめていた。

ジャージ姿で教鞭を持つその姿を見て、小学校かよ、と思わなくもないが、変人揃いのこの麻帆良だ。十分許容範囲ビリるが、ど真ん中ストライクだらう。

それに実に動きやすそうだ。おやけくもつ少し反応が遅れれば私の机の元へ向かってきただろうことは容易に想像できた。

「長谷川さん！ 先生がいま何て言つたか聞いていましたか？」

いけない、ボーッとしすぎたか。周りを見なくともクラスメイトの視線が突き刺さっているのが感じられた。やばい、赤面ものだ。いや、この程度このクラスじゃどうしたことないのはわかってるけど、私には私のアイデンティティつてのがある。

急いで何か返答しないと、えーっと、そもそも今は何の授業だったか・・・?

机の上の教科書が開いているページは、つと・・・

「もう、やっぱり聞いてなかつたのね。もう一度聞きます、”ななのだん”は覚えてきましたか？」

「・・・は？」

開け放しの窓から入ってきた風が、机の上の教科書を数ページ戻らせる。

そこには”はじめての九九”と書いてあった。

「・・・は？」

それは、一見とても甘く優しい夢。そう、夢を見ているのか、夢から覚めてるのかのも分からなくなるくらい、甘い甘い蜜のよつな夢だった・・・。

千雨の夢 はじまります。

「長谷川さん、せひ、しあいちが・・・」

しつてるわボケー！！ わざわざ隣から教えなくてもいいって！
誰だ、綾瀬か！？

「高町さん、教えちゃダメですよ？ ちゃんと自分で覚えない」と意味が無いんです。」

高町さん！？ 高町つてだれだよ！？ てか良く見たらガキしかいねー！？ やすがに龍宮は無理があつたか！？ 鳴滝姉妹がその辺にまざつてねーか！？

つてか私だつて無理があるわ！！

いや、待て、七の段だ、落ち着け、とりあえず七の段だ。こうこうときはあれだ、まず慌てず騒がず七の段で立ち上がり、しれっと七の段を答えて座っちゃえばいいんだ。

よし、まず椅子を引いて、立ち上がり、七のつて何だこの視界？ 妙に低くねーか？

まるで身長が30センチくらい縮まつたみてーな、つて・・・

身長が 本当に 縮んでやがる

やばい どーなつてるんだ これ？

「は、長谷川さんー？」

私は、意識を手放した。

掛け布団を蹴り飛ばし、勢い良く起き上がる。心拍数は最高記録を絶賛更新中で、息は喉が裂けるのではと思うくらい荒く、全身汗でびっしょりと濡れて。

1分か、2分だろうか、兎に角起きたまま固まっていたが、すこし落ち着いたところで辺りを見回す。

まず目に入るのはいつも寝ている自室のベット。次にコスプレ衣装が入っているクローゼット。そしてデスクの上に置いてあるパソコン、カメラ、部屋の隅に固められた撮影機材。そこは既に1年以上を過ごした寮の一室だった。

「良かつた・・・! 夢落ちでホントに良かつたあ・・・!」

やつぱあれか、最近流れてる学年最下位だと小学生からやつ直しつて噂、あれのせいか！

「麻帆良、でもそこまでしねーだぞ」とは思ってましたけど
どっかではあれを信じてたのか。で、夢に出たと。
くそ、ここにいるかぎり安眠もできねーのかよ・・・！

「なるべくおまかせ。」

・・・まあ、それもいまさらか。登校の準備しねーとな。
今日も最低の一 日になりそうだ。

「あー、ねみー・・・。」

昼休み。ふつーに一人で飯を食つて、休み時間はまだあと30分くらいある。

睡眠時間はいつもと同じくらいだけど、あの夢のせいが眠くて眠くて仕方ない。

「おや、いつも増して眠そうですね、長谷川さん。」

「ん・・・綾瀬か。」

伸びをしたり田の周りを揉んだりと、なんとか眠気を撃退しようと格闘してたところ、隣の席の綾瀬が話しかけてきた。
こいつは2Aの中でもまだ話せるほうだ。とは言つても比較的、といつ程度でしかないが。

「今日は夢見が最悪でな、ぜんぜん寝れた気がしねーんだ。」

まあでも友人の範囲に片足の先が入り込む程度には喋る仲もある。ほかの連中が濃すぎるだけに、綾瀬も一步引いた位置によくいるためだ。

「午後一番は新田先生の授業です。ある意味眠気が覚めるかもですが、何なら授業前に起こすので一眠りしてはどうですか?」

新田か・・・。新田の前で眠そうにしてたら朗読や感想なんかをわ

ざわざ当てて来そうだな。
ここは綾瀬にあまるか。

「あー、悪い。それなら寝させてもらひつかな。」

「ええ、眠気覚ましの飲料も用意しておくれですよ。」

「いや、それは・・・いい・・・」

「こいつの飲み物は・・・変なの・・・ぱつきだから・・・な・・・

「おや。本当にすぐ寝たです。そんなに夢見が悪かったですか。」

「ゆえー。炭酸コーヒーのトマト味しかなかつたよー?」

「いえ、あるいみお逃え向きです。どうですか、のどかも?」

「わ、わたしはオレンジジュースでいいやー。」

ま
た
こ
の
夢
か
！

明晰夢？

つまりこれはあれか？ 明晰夢ってやつか？
夢の中で夢だと自覚できてるんだし。あれって行動も好きに出来る
場合もあるらしいが・・・

「もー！ 急に倒れるから心配したんだよ！？」

「いや、じめんね高町さん。」

ビーツやら今回は見てるだけらしい。いつもると普通の夢と何も違わ
ないよな。

起きた時に無駄にドキドキしたりビックリすることが無いくらいか。
恐らくこれはやつさんの夢の続きで、倒れた私は保健室で寝かされた
んだろう。

で、隣の席の高町って子がこうして着いてくれているってところか。
付き添ってきたのか、授業が終わってから様子を見に着たのか、か
な。

「高町さんまだびっくりしてないんですね？」

お、私ナイス。まさしく聞きたいことを。

「えっと、長谷川さん起きた時に一人じゃ寂しいかなっておもって。

」

てへっなんて感じで首を傾げながら笑いかけてきやがった・・・！
ガキだけど、優しくていい子なんだろうな。そして天然だ、間違いない。

「そ、そ、う・・・。でも、いいよ。私に付きまとわないと。

優しくていい子なら、2Aのやつらも大概そうだ。けど、あいつらと私じゃ絶対に合わない。

友達以上の付き合いなんてできっこない。だから、きっとこの子も・

・
バンッ――！

「ちょっと長谷川――！ せつかくなのはが心配してるので、なによその言い方――！」

と、突然大きな音を立てて保健室の扉を開き、金髪の少女が怒鳴り込んできた。

いいんちよタイプか、基本は抑えてるんだなこの夢は。
高町、なのは？ が、保健委員か？ だとすると次に出るのは風紀委員か。

「アリサちゃん、怒鳴っちゃダメだよ――！」

あー、図書委員か。はずした。

「でもだつてすずか、なのはが昼休みずっとここにいるのに、あの言い方は無いじゃない！？」

「にやはは、私は別に気にしてないんだけど・・・。でも、同じクラスの友達だもん、ちょっとくらい一緒にいてもいいよね？」
「友達なんて、いらない。」

このアリサって子が言つてるのはまったくの正論だ。あーあ、夢の中まで私の環境は変わらないのか。

どれだけ仲良く友達付き合にしようとしたって、所詮私が私に嘘をついて、上辺だけの綱渡りのような友情しか生めやしない。それならいつそ友達なんていらないさ。その方が楽だ。

「友達が要らない？ 何でそつ思つの？」

図書委員が・・・じゃない、すずかだったか、が理由を聞いてきた。その後ろではアリサが高町に取り押さえられている。ますますいんちよだな、アリサ。

「だつて、みんな私のこと嘘つきつていうから。」

それについてはもう諦めた。人が車より早く走ろうが、100mを超える木が普通にはえてようが、ロボットが歩き回つてようが。だれも気に留めないどころか、当然だと思つてやがる。

そんな中一人で騒ぐのには、もつ、疲れた。

あーあ、夢の中で、ガキ相手に何ひつてるんだろうな、私。

「あんたの何が嘘つきだつていつのよー ためしに何か言つて見なさいよ！」

ためしに、ねえ・・・。じゃあー

「100mを超える木が観光名所になつてない

「えつ？ えつと、世界中から観光客が来ると思つけど・・・」

ん・・・？

「恐竜ロボットが走り回つてた」

「はあ？ 立ち止まつて手と首と顔を動かすくらいがせいぜいでし

よ？」

あ、あれ……？

「車より早く走る人がいたんだけど……」

「いやほほ、や、やすがにそれは嘘つて言われると思ひなあ……」「

あ、そうか、これは夢だから……

「あんた、わざと変なこと言つて私たちを巻きこむとしてない?」

「……うん、変なこと、だよ」

「ひょ、ひょと峡谷さん!？ なんで泣いてるのー?」

「こは麻帆良じゃないんだ……。ひょとして、これは私が望んだこと、なのか。

「高町さん。」

「え、な、なに！？」

「ごめんね、失礼な」とつて。」

「……！ ううん、あ、名前で呼んでくれたら許してあげる……」

「まったく、いつものが始まつたわ」「なのはちやんらしこね」

「……なのは?」

「うんー、千鶴ちゃん!」

この夢の中では、私は自由に友達を作れるのかもしれない。
所詮夢だけど、そんな気がした。

キーンパークーンカーンパークーン……

「あ、お休み終わったやうー。」

「長谷川、あんたはお母さんが迎えに来るからまだ寝てない！」

「じゃあまた明日ね、千雨ちゃん！」

私は涙を流しながら、手を振つて3人を見送つた。

その後、母親が迎えに来て、一緒に手をつないで家へと帰つた。

「倒れたらしいけど、いぶん嬉しそうね、千雨？」

「うん、友達ができたの！」

「そつか、良かったわね。」

夢の中の母親とこんな会話を交わしつつ。
つーか、そろそろ醒めるべきじゃね？

夢＝理想？

「長谷川さん。長谷川さん！」

「……んあ？」

結局。あの夢は家に帰つて食事して、風呂に入つて歯磨いて自分の部屋でゲームして、ベットに入つて暫くたつて終了した。恐らく寝たんだろう。

やはり夢だからかダイジョスト風に流れしていくので時間の経過は大して気にならなかつたけど、ほとんど一日の経過を夢に見るのも珍しいもんだ。

いや、授業の途中からだから3／4くらいか。どうでもいいな。で、夢が終わつたと同時に綾瀬に起された、と。ずいぶん切りがいい夢だ。

「はい、約束どおり眠氣覚ましの飲料です。どうぞ。
「た、炭酸」「ヒートマット味……だと……っ！？」

顔を上げて隣を見ると、そこには綾瀬と富崎がいた。それはいい、こいつらと早乙女はセットみたいなもんだ。

それに綾瀬に授業前に起こしてもらひよつ頼んでたしな、何の疑問もない。

炭酸」「ヒー？ まだアリだ。馬鹿なもん作つてんじゃねーよつてメーカーに文句いつて、乗せられて買ってんじゃねーよつて購入者に文句いつた後なら、一口ぐらい飲んだつてい。いや、味次第では2・3口飲んでもいいさ。
だがトマト、テメーはダメだ。

「おや、まさか飲めない？ これははわざわざのどかが校外の自販機

へ行つて買つてきてくれたものなのですが。」

「む、ゆえー。あれはついでだつただけだから……」

くつ、なんだ、私が悪い流れなのか？　でもこのチョイスは無いだろ！？」

「ああ、くそつ！　こうなりやヤケだ！」

「わかつたよ、飲めばいいんだろ！　よこせー！」

綾瀬から缶を引つたくつ、キャップ式の口を回し開け、口元へと運ぶ。

そして一口田を口に流し込んだ時、まず最初に広がるのは炭酸の刺激。

それとともにコーヒーの風味が口いっぱいに広がって、

(あ、案外ありかも？)

と不覚にも一瞬思つちました。

しかしござ飲み込もうとしたとたんに襲つてきた、猛烈なトマト。そしてそれがコーヒーと混ざり合ひ、臭覚を乗つ取つてしまつ。さらに炭酸に乗り刺激となつて口の中を蹂躪し、若干温いから爽やかさの欠片もないわけで……

「・・・不味い」

一口飲んだだけでギブアップだ。これは飲めたもんじやない。

「ふふふ、この味が分からないとはまだまだですね、長谷川さん。」

ふと綾瀬の机を見ると、そこには空になつた炭酸コーヒーとマト味。ほんと、こいつは飲み物に関しては群を抜く変人だ。味覚全般かもしれないけど。

その詫問に、

「飲むか？ 富崎。」

「（ふるふるふる）」

ほら、富崎だつて若干青ざめながら首を振つてやがる。

「もう・・・一人ともまだまだです。」

キーンゴーンカーンゴーン・・・

「あ、それじゃ私はもどるねー。」

授業開始のチャイムがなる。新田は珍しく少し遅れるようだ。いつもならチャイムと同時に教室へ入ってきて、まだ立ち歩いている生徒をみて小言を大声で言つべらじはするんだけどな。
あと認めたくないが、炭酸ゴーヒートマートのおかげで眠気は完全に吹き飛んじまつた。

「そうそう、長谷川さん。夢見はびりでしたか？」

「あー、これのせいで血糖しだ。」

そう言ひ、まだ手の中にあるゴーヒーを手にし掲げてみせる。

「ふふ、つまり夢自体は良かつたですか。」

「ん？ ああ・・・」

夢自体は、か。まあ、たしかに・・・

「悪くは、無かつたぜ。」

結局、あの後は（2A基準では）とくに何事もなく、6時間の授業も終わり私はまっすぐ寮の自室に帰ってきた。

なんとなく捨てずに持ってきてしまった炭酸コーヒー・マートを見つめながら、パソコンをつけて今日あつたことをひりひりと考える。

（友達、か・・・）

あの夢はきっと私の理想の小学校時代、なんだらう。
100mを超える木が日本にあるのは変だし、ロボット技術は人型
ロボットが駆け足する程度で大ニュースだ。

車より早く走れる人がいっぱいいて、学生なんてしているわけがない。

けどここではそれが当たり前。変なのは、いつだって私だった。

（そこまで精神的に弱くはない、と思つてたんだけどな）

今日の綾瀬との会話みたいに、何の気概もなくバカなことをいつでも言い合える・・・

そんな友達がほしかった、んだろうか。

あの夢は2回連續で見た。しかも夢にありがちな、2~3分も経てば忘れるような夢じやなく。

まるで実際に経験したかのように鮮明に覚えている。
じゃあ、ひょっとして。

も「一度寝たら、あの夢の続きが、見れるんじゃ……

「……はあ、バカらしい。」

そんなわけはない、単なる偶然だ。きっともう一度寝たら、全然関係ない夢を見るか、夢なんて見ずに時間が過ぎれば起きるんだろう。そう、馬鹿馬鹿しいことを考えてないで、趣味のコスプレか掲示板への返信でもしねーと。

(ナイーブ、ってやつか？ それともセンチメンタル？)

気分転換でもするか。とりあえずこのコーヒーは冷蔵庫にでも仕舞つておこう。冷やせば少しは飲めるもんになるだろ。

そう思い、パソコンで自分のホームページを開きつつ、コーヒーを冷蔵庫へ持っていく。

中にはペットボトルに入った水しか入っていない、自炊してなればこんなもんだ。

「コーヒーを仕舞ったあと、ホームページの掲示板を見るが、こんなときに限つて新しい投稿は無い。

コーヒーについて書き連ねておけばそのうち誰か返信してくれるだろう、とは思うが……

(・・・ちょっとだけ、寝るか？)

馬鹿馬鹿しい、そう思いながら。

いや、夢を見たいんじゃない、ちょっと食事時まで軽く寝たいだけだ。

今朝はよく寝れなかつたし……
と、だれに宛てるでもない言い訳を考えつつ、ペットの中へと入つていった。

続く夢

「千鶴…… おきなやーこー！」

・・・普通に見れたよ、続き。

あれか、前回が寝て終わったから、今回は起きたところからつけてとか？

それでたぶん寝ると夢から醒めるんだろう？

「千鶴ー！ まだ寝てるのー！？」

「こま行くーー！」

しかも今回は行動まで自由に出来る明晰夢、と。まるで蝴蝶の夢だな。

つと、とうあえずパジャマから着替えるか。このパジャマもガキの頃着てたのと一緒にだな。

別に感慨深くもなんとも無いが、しつかり覚えてる自分にちょっと苦笑してしまつ。

これを着てたこはまだ自分の言つことを聞いてもらおつと一生懸命で、周りから変な目で見られてたつけ。

この夢は家そのものは実家と一緒に、ただ通つてゐる小学校が違う設定らしい。

海鳴市といつ街に住み、私立聖祥大附属小学校の2年生。

麻帆良のまの字も周りには無く、非常識の気配もどこにも無い。

あ、いや、昨日のアリサとすずかはお嬢様らしげが、まあその程度だ。

こんな設定もすいすいらと想い出せるのせ、夢なりではのじ都合主義とこつやつか。

「朝^{あさ}」はなんめるわよーーー。」

「はーいーーー。」

おつと、いじりの母親が呼んでる、怒り出せなこいつかにしゃべれと着替えて食べる事あるか。

夢の中で食事するのも妙な気分だぜ・・・・。

「いつてきまーすーーー。」
「いつてらつしゃーーー。」

朝飯を食べたあと、いつものように、というのも変な気分だけど、まあいつものようにバス停まで歩いて向かう。

上級生か下級生か知らないが、バス停には既に数人の小学生が並んでいたが、特に挨拶することも無く列の後ろへと続く。

バスを待つ間、小学2年生ってどんな授業やってたかを思い出してみるけど、さっぱり思い出せない。

どうやら算数は九九をやっているところみたいだけど・・・まあ、どうにでもなるだろ。

伊達に中学2年生をやつしているわけじゃない。

お、ひょっとしてこれって強くてニコーゲームつてやつか？

全学生の憧れだな、うん。

なんてことを考えているうちにバスが到着し、適当に空いてる場所へ座り込んだときに

「千鶴ちゃんーーー。」

バスの一番後ろ、5人掛けの席を占領してる昨日の3人組の一人、なのはが大声で呼んできた。

「恥ずかしいからそんな大声で呼ぶな！」「こやはは、ごめんごめん。」

そう文句を言いつつ3人組の元へ向かう。なのはは大きく、すずかは小さく手を振り、アリサは腕を組んで不敵な笑みを浮かべていた。こんな小さなことでもそれぞれ性格の違いが出るもんだ。

そしてアリサ、お前はどこの王女様だ。

「あれ？ あんたこの時間のバスに乗ってたんだ。」

「おう、じついう後ろの席は不良の指定席だからな、田舎わせないようにしてた。」

「だ、だれが不良よ！」

「クラスメイトが心配で保健室と教室を行ったり来たりするいい子だもんな。誤解してた、すまん。」

「・・・っ！」

おーおーアリサのやつ顔真っ赤。ちょっとしたジャブを打つてきたから、お返ししただけなんだけどな。

その隣ではすずかが「長谷川さんの勝ち！」なんか言つてるし。

そしてやつぱこいつ典型的なツンデレしか。ツンデレお嬢様つてテンプレすぎじゃないか？

「まあ、これからも宜しく頼むよ『アリサ』、『すずか』」

そう言つて一人に笑いかける。そうするとちょっと間が空いた後、

「当然じゃない、千雨」

「うん、千雨ちゃん」

「あ、ねえねえ私は！？ 千雨ちゃん！？ ねえ！？」

ああ、やつぱいいな、じつこの。

そして昼休み。私たち4人は一緒に屋上で弁当を食べていた。
授業はやはりというか当然といつか、なんの問題も無く終わるよう
に思つたんだけど

「ちよっとなによ千兩！ 因数分解が分かるつじぢづこじとーへ..」

そう、算数があまりにも暇なため、外をみてぼーっとしていたら、
また教師に当てられた。

問題自体は1桁の掛け算なのでぱつと答えたのだが、その折教師か
らきりんと授業を聞けと小言をもらつちました。

そこで売り言葉に買い言葉といつか、うん、たぶん浮かれていたん
だろう。いつもの私なら適当に返事をして流すところなんだけど、
つい・・・

「因数分解までなら分かるから大丈夫です。」

つて、答えてしまい、そのまま教師のだす因数分解（中1レベル）
をパパつと答えちました。

ぬああ、現実では常識外れの連中に嫌気がさしていただはずなのに、
こつちで私が羽目をはずしてどうすんだ・・・！
しかも大丈夫つて、なにが大丈夫なんだよ！ 痛い子じゃねーか・・・
・！

「千雨ちゃんって頭良かつたんだね。塾とか行つてるの？」

「うがああ・・・！ つて、ん？ 塾は行つてねーよ。」

「じゃあなんで因数分解なんて知つてるのよ？」

「あー、家庭教師？ みたいなもんだ。」

うん、嘘は言つてない？ 微妙だな。

まさかこれは夢の中で、現実では中学2年生ですなんて言えるわけないし。

その後もずるいとか教えるとか言つてくるアリサを適当にあしらいつつ食事を続け、そろそろ昼休みも終わるうかといつぱ。

「ねえ、今日放課後千雨ちゃんの家に遊びに行つていー？」

と、なのはがこんなことを言い出した。

私の家に？ 遊びに？ 別に見られて困るものは（寮の浴室と違つて）何もないし、特別断る理由もない、か。

「いいけど、ゲームくらいしかないよ？ 普通の家だし。」

「いいね、ゲームしたい！」

「勉強教えなさいよ！」

「私も行つてみたい！」

と満場一致で可決され、放課後私の家に案内することになった。

そして今度こそ何事もなく授業が終わり、放課後。

校門まで迎えにきたアリサの家の車で（リムジンだった）私の家ま

で案内し、部屋に上がりさせた。

思えば何気に初じゃねーか？ 友達を部屋に上げるのって・・・。
つて、いかん、これは夢だ。なに普通にカウントしようとしてるんだ私は。

それに麻帆良の連中を部屋に上げるとは絶対ない！

「あーー！Jのカメラ最新のやつだ！？ 千雨ちゃん撮つていい！？」

と、そんなことを思つていると意外にもなのはがカメラに興味を示した。

部屋の中のものはある程度向ひと回じものがあるらしい。カメラやパソコン、あと小物だな。

撮影機材とコスプレ衣装は無いが、これはきっと私が隠したいと思つているからなんだろう。

「ああ、適当に撮つていいくぞ。メモリーもまだ空きがあるはずだし。

」「やつたー！ ありがとう！」

それじゃ飲み物とつてくるから、適当にしててくれー。
と、3人に声をかけて（聞いてるかどうか知らないが）、私は飲み物を取りに台所へと移動した。

何があるかなー、麦茶でいいかなー、と思いながら冷蔵庫を開けると、そこには

「J、これは・・・！」

「またせたなー」

「あ、お、おか、おかえりー!?」

「・・・ん? どした?」

コップ4つに麦茶が入ったボット、あと黒い液体が入ったコップを1個お盆に載せて、私は部屋へと戻ってきた。

てっきりカメラで適当に部屋の中を取りまわってるか、ゲームが本棚でも漁つてるとばかり思っていたが、予想は外れ3人してカメラのディスプレイを覗き込んでいた。

お互いを写真に撮つて写り具合を見るのか? とも思つたけど、それにしては慌てすぎだ。

一体何してるとかと思い私もカメラのディスプレイを見ようと覗き込むも

「ダメー!?

隠されてしまつた。

「おいおい、それは私のカメラだぜ? 何撮つたんだ?」

「え、えーと、千雨ちゃん怒らない?」

「言つてみな。」

「あ、あのね、撮つた写真を見ようとしたら、こんな写真が出てきて・・・」

そう言い、ディスプレイを私の方へ向けるのは。
そこに写つていたものは・・・

「ぬあああああー? 見るなー!」

モリノの「スプレーをした私（中学生♀）」だった。

「「！」『めぐね！？ わたとじやないんだよー！？』

「あはははー！ 似合つてゐるじやない！ なんで隠すのよー！」

「うそ、ホント可愛いよね。これって千鶴ちゃんのお姉さん？」

お、おね？ そうか！ いま私は小学生だから……！

「や、やうー いや、従姉妹だ！ いやーうらに来てカメラで撮つていくんだよ！ あははー！」

ああ、くそ、恥ずかしいな！ なんでこいつなのに限つて一緒にくるんだよー！？

『スプレー衣装がなくて安心してたのにー 油断もすきも無いな！

「ああくそ、アリサ！ 思いつきり笑いやがつて！ お前はこれを見つめ！」

「ん？ なにこれ、『アーラフ』」

そう言ひ、アリサには麦茶じゃなくて冷蔵庫に入つていた『アレ』を渡す。

ああ、『アーラフ』みたいなもんだ、そつとアリサは特に警戒もせず一口飲む。

そう、もうちらんの正体は……！

「んぐ！？ ツカハ、ゴホツ、ま、不味い！？ なによこれー！？」

「ははは、炭酸『コーヒー』トマト味だ。」

「どこのから買つてきたのよこんなもんー！？」

「ハハハ、写真の従姉妹が持つてきただけど不味くて飲めなかつた。」

「そんなもん飲ませるんじゃないわよー！？」

「そ、そんなに不味いの？ 私も少し飲んでみたい・・・
や、やめておきなさい！？ なのは！？」

お、今度はアリサとなのはが漫才を始めたな。今のうちにカメラ隠すか・・・。

つと、すずかが寄ってきた？

「ねえ、千雨ちゃん、吸血鬼とか好きなの？」

「あ、あ？ いや、吸血鬼物か？ んー、結構好きだぜ？」

「ふーん、そつかあ・・・。」

一体なんだ？ すずかのやつ、なんか変だつたけど。

「あ、私も飲んでみたい！」

まずーーい！ って言つて麦茶を飲んでるなのはから、コーヒーを受け取るすずか。

あ、案外飲めなくもないかも・・・？ なんていつて二人からすごい目でみられている。

「あはは、いいよな、やっぱ。」

うん、楽しいな、やっぱり。

「ちょっと千雨！ のこりはあんたが飲みなさいよー。」

「げ！？ すずか、頼む！？」

その後もみんなで騒ぎ、ゲームし、パソコンの中にあつた別のコスプレ写真も見つかってまた一騒ぎし、空が赤くなり始めたところで解散となつた。

「お邪魔しましたー！」

「また明日ね、千鶴ちゃん！」

「ばいばい！」

「元気な子達だったわね！」
昨日言ったお友達？」

一
・
・
・
・

P i P i P i P i . . . P i P i P i P i

その後、やはりというかなんと言うか、夜になりベットに入つてしばらくしたところで目がさめた。

部屋の中からは物音一つせぬ。

部屋の扉か向かいの世界（無端牆）といひ、他の世界（端牆）を隔て
る境のよつで。

「たのしかつた、なあ・・・。」

そうつぶやくと、起き上がり、冷蔵庫から水を取り出し一口飲む。
そして、「何も入っていない」冷蔵庫へ水を戻し、食堂へと向かつ
ていった。

境界に立つとき

みんなーーおハローーー♪(・・・) q 今日は大・大・大ニュースがあるんだよー！

なんと！ けじねさつき解析夢を見ちゃいましたー！

5番田の白鳥 > 夢のなかで夢とわかるやつですね？ 私も見てみたいものです。

通りすがりB > ちうタンどんな夢みたの？ (w

え～っとね、結構忘れちゃったんだけど～ (v v) i 友達と遊んでる夢だつたの！ 楽しかったよ～

学園長 > もしかして：明晰夢

アイスワールド > 僕も解析夢見てみたいな！ それでちうタンと(以下略)

ちうファンHIRO > でも解析夢って危ないって聞いたことがありますよー？

え～～、けじねさつき(～～) ただの夢じゃないの～？

アイスワールド > ちうタンの夢を見れるなら本望ー むじゅう褒美！

5番田の白鳥 > 夢そのものじゃなく、それをどう捉えるかですよ。

通りすがりB > 一度寝して遅刻の危機だね (w

う～ん、どう捉える？ 覚えてないもんよくわかんな～や。でもでも遅刻はとっても危険かも～！

5番田の白鳥 > 休めばいいのです。

アイスワールド > 僕も休んで夢を見続けるぜ！

学園長 > ず、するはいかん！

通りすがりB > しかたないね(w)

ちひなちゃんと毎日学校に行ってるよー

あ～、でも来週から期末テストなんだよ！ 勉強しなきゃーーー！(^)

(^) q

ちうフアンHIRO > 実力を見るためのテストなんだから勉強
しなくていいよ！

アイスワールド > 僕も僕も。でも僕は夢でちうタンに教えても
いい

ところまで今日はもつ落ちるねー ばいばーーー！

返事を待たずにチャットルームを閉じる。期末テストで最下位だつたら小学生からやりなおし・・・

別にそのうわさを本気で信じていいわけではないが、好き好んで悪い点数を取りたいわけでもない。

いつも通りテスト範囲の教科書問題を一通りやる程度で良いだろ。それでいつも平均点より少し下くらいの結果になる。まじめに勉強する気も無いしな。

なんか担任のガキが妙に張り切っていたのが気になるが。
そんなことを思いつつカバンから教科書とノートを取り出そうとした

「ちひ、持つてくるの忘れたか。」

教室の机の中に入れっぱなしで、持つて帰つて来ていないことこづく。

さて、そつすると一気に手持ち無沙汰になつちまつた。
チャットでもするか？ でも既に勉強するといつて落ちてゐる手前、
なかなか戻り辛いものがある。

じゃあコスプレ写真でも撮るか？ そう思いカメラを手にとるも、

『千鶴ちゃん撮つていい！？』

『あはは！ 似合つてるじやない！』

『可愛いよね～』

家の部屋での光景が急に頭をよぎる。

結局あいつら何撮つたんだろうな？ と思い、カメラのメモリーを
参照しようと電源をオンするが、どうやらバッテリー切れなのか画面
は黒いままだ。

「ああ、電源いれたまま隠したしな。」

コスプレしていることをリアルの友人にふれて回るほどオープンじ
やない。

あいつら3人は笑いはするだろうが（特にアリサ）、決して馬鹿に
したり受け入れなかつたりすることは無いだろう。

そつは思つが、いまいち踏ん切りがつかないのがオタク心というも
のだ。

など考えつつ、メモリをカメラから外し、カメラを充電器にセット
する。

すると充電中を示すオレンジのランプが光る、やはりバッテリー切
れだつたらしい。

それじゃあと、メモリをパソコンにセーブしちゃうと。

「・・・までまでまで！？ なにナチュラルに確認しようとしてるんだ私は！？」

「ありや夢じゃねーか！！ なんだよリアルの友人って！？ これじゃ危ない奴じゃねーか！」

メモリを開いたところであいつらの写真があるわけ無い！ しつかりじろひ私！？

「あー、もつ！ 寝るー。」

すっかり何もする気も起きなくなつた私は、まだいつも寝る時間からするとかなり早いが寝ることにした。

やってらんねー、そういう思いと、また夢が見れるのかなという仄かな思いがあることは自覚している。

馬鹿馬鹿しい、夢に何期待してるんだ私は。

そう思いつつも、見れたらいいな、1日で終わるのは勿体無いなど、思いながら・・・。

翌朝。

「結局見れたよ。なんだ、いつまで続くんだ？」

小学2年生の夢はまた見る事が出来た。あいつらと一緒にバスで学校に行き、つまらない授業を聞き流し、一緒に弁当を食べ。

アリサに数学を教える代わりに英語を教えてもらうことと約束し。ネイティブな英語と教科書英語とはまた違うだろうが、あのガキなら意味さえ通じれば正解にするだろう。

そして午後の授業のあと、今日は塾があると言つアリサ達と別れ、途中までなのはと一緒に帰り。

家についたあとは家族としゃべり一緒に料理をして、作った料理をお父さんに褒められ幸せな気分のまま一日が終了した。

現実の小学生のときにはありえなかつた一日だ。決して家族と仲が悪いわけじゃねーんだけど・・・。

「いっそあっちが現実ならいいのに。」

つい、そんなことを呟いた。なのは達の他にも教室にいるやつらと友達になり、週に何度も遊び、家では家族と和やかに過ごす。すこし想像しただけでもそれはとても楽しい毎日になリそうだ。

「はあ・・・。学校いこ。」

そんな現実味のないことを言つてもしかたない。それこそ『夢』だつつの。

なんて考えなら、夢の中身を反芻しつつ登校の準備を始めるのだった。

「何ですって！？ 2Aが最下位脱出しないとネギ先生がクビに～～～！」

教室に入ったとたん、いいんちょのそんな叫び声が聞こえてきた。おう、そりゃいい。最下位といわず今すぐクビにしろ、大人になつてから出直せつてんだ。

だいたい免許なんて持つてないだろ？ 後に生まれた「先生」なんて何の冗談だ。

そう思いながら自分の席につく。綾瀬がまだ来てないな、珍しい。いつも私より早く来てるのに。

つと、やつぱり机の中に教科書置いたままだったか。とりあえず全部出して、5教科だけ持つて帰るか。

とりあえず整理して持つて帰らないものをロッカーに移動するか。。

と、そこで叫びながら廊下を走る音に気がつく。どこの馬鹿だ？ と思い廊下のほうを見ると、

「みんなーー大変だよーー ネギ先生どバカレンジャーラーが行方不明に・・・！」

・・・なんだよ行方不明つて？ 聞けば図書館島で遭難したらしい。知らんけど遭難するようなサイズの島かよ・・・！ 本当になんだこここの奴らは！

おかしいだろ！？ だれか突つ込めよー？ なんでそんな遭難する場所が街の中にあんだよ！？

それにテストが近いってのに先生までそろつてみんなで探検かよ！？ 挙句遭難しましただあ！？ 授業どうするんだよ！？

「とにかくみなさん！ テストまでちゃんと勉強して最下位脱出ですわよ！ その辺のまじめにやつてない方々も…」

「置き勉なんてしないでテスト勉強しないとネギ先生いなくなっちゃつよーーー！？」

イライラしながら教科書を整理していると、クラスのやつらが私達に・
・・正確には、教科書を整理している『私を見て』そんなことを言
いやがつた。

くわ、なんであのガキのために勉強しなきゃなんねーんだーーー！

「・・・知つたこつちやねーな。」

「は、長谷川さん？」

なんであんなガキのために勉強するのが当然みたいな空氣なんだーーー！？
なんで探検なんてバカなことしてん奴らの尻拭いを私もするんだよ
！？

ああ、もつやだ、ついていけない。クラス解散でもネギ先生クビでも好きにしゃがれ！

「いいんちょ。わりーけど早退する、宜しく書つとこしてくれ。」

「は、長谷川さんー？ 待つてトドケーーー！」

いいんちょが引き止めてくるナビ知つたことか。

教科書を置いて、そのまま振り返らずに学校を出て、寮の自室へと
帰り。

私はベットに直行した。

千雨の選択

「ねえねえ、今夜お泊り会しない！？」

学校の屋上でいつものように弁当を食べているとき、突然なのはがこんなことを言い出した。

「あ、最近やつてなかつたよねー！」

「いいけど、誰の家でやるのよ？」

明日から祝日で休みだし、千雨ちゃんとお泊り会してないしね！
となのはが言ひ。

ちなみに私はまだ口の中にからあげが残っているので喋れない。冷凍食品じやない、実際にお母さんがつくつたやつだ。

いつも言うと弁当のために朝から揚げ物をする気合の入つた母親だと思つかもしれないけど、何のことはない、昨日の残りだ。形が悪いのは私が作った分だし。

その証拠にご飯は冷凍食品のピラフだ。今時のキャラ弁なんてもつての他。ま、弁当作つてくれるだけいいけど。

向こうの小学校は給食だし、中学校は金持つて食堂だし、弁当食べるのには運動会か遠足くらいこだつたな。

「んー、私の家は今日お父さん達居ないからダメかな。」

「家はいいけど、前も私の家だつたわよ。」

そしてすずかの家はダメで、アリサの家は前もやつたと。そつすると私の家かなのはの家になるんだけど

「千雨ちゃんの家はだめ？」

「ん、私の家か？」

なのはが言つには私の家でやつたゲームの続きがやりたいらしい。それじゃついでに英語教えるから数学教えなさいよ・ とアリサが言い、すずかも賛成に1票投じた。

別にそう問題はない・・・よな？両親もいるし、部屋も片付いてるし。

あ、でも一応確認しておくか。

「ちょっと待つてな、いま確認してみる。」

そつ言いつつ携帯電話を取り出し、母親にかける。
あ、じゃあ私も今日泊まっていいか聞いてみるー！ と他の3人もそれぞれ電話しだした。

『もしもし、千雨？ どうしたの？』

「もしもし。あのさ、今日つて家に友達泊めても』

『あらあらまあまあ！ 誰々？ この間の3人の子たち！？』

「あ、うん、そ』

『それじゃ晩御飯沢山用意するわね！ 期待して待つてなさい！

お母さん早速買い物にいつてくるわよー！』

「あ、ちょっと』

・・・切れた。これはオッケー、なんだよな？ 電話して正解だつたんだよな？ 不安だ。

速攻で電話が終わつたのはいいが、みんなはまだそれぞれ電話中だ。今のうちに弁当を片付けるか。

それにしてもお泊り会か。初めてだな。アメリカ被れなのか最近じやパジヤマパーティーなんて言い方も増えてきたみたいだけど、やっぱ基本は「お泊り会」だよな、ふふ。

「・・・千雨？ なにニヤニヤしてるのよ？」

「ばつ、ちょつ！？ な、なんでもない！ 家はオッケーだつたぜ

！？」

・・・『氣づけば3人とも電話終わって、つちを見てやがった。くそ、

失敗したぜ。

そして放課後。今度はバスを使って4人で私の家に移動した。

「「「おじやましまーす！」」

「ただいまー。」

そう声をかけて家に入ると、居間のほうから返事が聞こえて玄関へ向かってきた。

もう買い物終わって居間にいたのか、お母さん。
なんかこっち来てるしちょっと待つか？ なんて思つてゐつちに扉
が開き、お母さんが現れた。

「いらっしゃい、みんな！ もーこの子つたら友達作るのが下手で
あなた達が初めてなのよ。みんな仲良くしてあげてねー？」

「ちょ、ちょっと！ いきなり何言い出してるんだよー！？」

「へー、私達が初めて？」

「私は千雨ちゃん大好きだよー！」

「はい、いつも仲良くしてもらっています。」

もー、余計な」と言わないで！ と未だに笑っているお母さんを間に押し込み、私は先に部屋へと向かつ。ああ、恥ずかしい・・・暑い、私いま顔赤くなつてないか？

「何々？ 千雨、照れてるの？」

「て、照れてねーよ！」

「あはは、千雨ちゃん顔真っ赤ー！」

もうー 笑うなよ！ なんていいつつ部屋に入り、さっそくなはとすずかはゲームを開始する。

そしてアリサには先に数学を教えるかと思い、机の中から中1の時のノートを引っ張り出した。

「うわー、あんた本当に本格的に勉強してるのね。なに書いてあるかさっぱりわかんないわ。」

「わかつてたまるかよ。私だってそれなりに苦労して覚えたんだぞ？」

「それもそうよね。ここまでわかんないと返つて清清しいわ。」

とはいっても、やっぱりいきなりこれじゃ教えないか。でもむさすがに小学校のノートはないし。

「しゃーない、前提からゆづくつ教えるか。」

「ふふ、よろしくお願ひします、千雨先生？」

「はいはい、お願ひされたよ、アリサ」

その後、夜になりお母さんが作ったやけに豪勢な晩飯を食べ、皆で狭いお風呂に入ったりお喋りした後。

「ねえねえ、千雨ちゃん！ 記念写真とつていい？」

なのはが充電器に挿しつぱなしにしてあるカメラを見て「こんな」とを言い出した。

「あ、いいわね！ 撮ろう撮ろう！」

「さんせーい！」

「記念写真ね。いいけど、私が撮るのか？」

「ばか！ それじゃ千雨が写らないうじゃない！ お母さんに頼めない？」

「お母さんねー。ちょっと待つて、聞いてみる。」

そう言い、3人を残し居間へ行く。お母さんはサスペンス物のドラマを見ながら携帯機のゲームをしていた。別にいいけど、どうしかにしろよ・・・。
それはともかく。

「ねえお母さん。4人で写真を撮りたいからシャッター切つてもうつ

「まあまあもちろんいいわよー。あ、化粧する？」

「こ、しないよーー！」

あはは、わかつてるわよー、なんて言つて立ち上がり一人で部屋へと向かう。じゃあなぜ訊いた。

「それじゃあ撮るわよーー。みんな笑つて笑つてーー！」

「はい、千雨が真ん中ね！」

「私たちめぢやんの隣ー！」

「ちよ、くつつきすぎー。」

「私千雨ちゃんの後ろうねー。」

「はい、チーズ！」

カシャッ

デジカメのくせに相変わらずそんな音を立てて、集合写真は撮り終わつた。

「ねえねえ、プリンタがあるついとば印刷も出来るんでしょ？
やりなさいよー！」

「あ、私もほしいーーー！」

「ああ、分かってるって。いま印刷するからちょっと待つてな。」

「ありがとうーーー！」

その後、何か知らんがお母さんも欲しいと言つたので5枚印刷し。
それに渡したあと、私の分は机の中にしまつ。
お母さんは写真を渡すと部屋を後にし、3人は勝手に喋りだしたので、私はついでにインターネットブラウザを立ち上げた。

「ここの辺は向こうと変わらなこよな。さすがに麻帆良や、ちうのホームページなんかは無いけどよ。」

そんな独り言をつぶやく。

暫くネットサーフィンを続けていると、気づけば3人組が静かになつている。

見るどアリサとすずかは既に眠り、なのはも漫画を読みながらうとうとしている。

一分ほど見ても漫画のページが進まないじから、ひょっとしたら寝ているのかもしれない。

そんなに長い時間ネットしていたとは思わないけど、ガキは電池が切れるかのように突然寝るからな。

なんてちょっと失礼なことを思いつつ、私はネットを続ける。

最近思うのは、これが本当に夢なのか？ といふことだ。

馬鹿馬鹿しい、夢に決まってるじゃないか。そつ思つてはいるが、一方で疑問に思う私もいる。

夢ならなぜ私の知らないことが出る？

（アリサの英語なんて知らないことばっかりだ。）

きつと知らない方に聞いていて、それを覚えていたんだが。

（私はから揚げの材料の分量なんて知らない）
テレビの料理番組でもやっていたんだろう。

（そもそも海鳴市や聖祥小学校ってなんだ？）
夢に理屈を求めて仕方ない。

そう。夢に理屈を求めるなんてナンセンスだ。だけど

「夢。なんだよ、なあ・・・？」

そう。寝ると見るんだから、夢しかないじゃないか

「あれえ？ 千雨ちゃん、寝ないのー？」
「ん、なのは、起きてたのか。」

呼ばれて振り向くと、なのはが眠そうな顔でこちらを見ていた。
てっきり寝てるとばかり思っていたが、辛うじて起きていたらしく。

「いや。最近いつも、夢見が悪くてな。」

「こやな夢見るの?..」

そんな感じだ。せつぜつパソコンを落とす。私も眠くなつて来た、そろそろ寝るか。

そう思い立ち上ると、なのはが近寄つてきて私の腕を取つた。ん? なんだ?

「じゅあ、一緒にね?..」

一緒に寝ればいやな夢もないよー。

そう満面の笑みで言わると、なかなか返答しきるものがある。あ、ああ。なんとか小声で返事をし、なのはに腕を引っ張られたままなのほの布団の中へと一緒にに入る。

「それじゃ、おやすみー。千鶴ちゃん。」

おやすみ、なのは。そいつとい、私の腕を抱いたまま、あいつと寝てしまつた。

仕方ない、私も寝るか。起きたら何から始まるんだつたかな。確かに

学校を早退して、毎くらこになつてるか?

そんなことを考えてこらへり、私の意識は闇へと落ちていつた・。

「ん・・・、毎、か・・・?」

目が覚める。さつと寝だ、飯食べて勉強でもするか？

なんて寝ぼけた頭で考えつつ起き上がろうと、腕を動かそうとして、そ

「・・・は？ なんで？」

右腕にはなのはが、左腕にはすずかが抱きついたまま寝ていて、そして正面にはアリサがニヤニヤしながら携帯を構えていた。

「あ、あれ・・・？」

大人達の事情

パチン　パチン・・・
パチン　パチン

麻帆良学園の一室、学園長室に囮碁の音が響く。

上座に座るのは正しく好み爺と呼ぶに相応しい、白く長い鬚と後頭部を蓄えた老人。

下座に座るのは凡そ囮碁とは結びつかない、まるで西洋人形のよう

な容姿をした金髪の少女。

そしてもう一人、少女の後ろには一見人間のようで、よく見るとアンテナや球体間接といった人間にはありえないパーツを持った女性が控えている。

テスト前だからだろうか、学園の中や外からいつも聞こえる生徒達の賑やかな笑い声は鳴りを潜め、先生が廊下を歩く音がやけに響いている。

パチン、と。

老人が一手を打つと同時に、少女に向けて言葉を放つ。

「今日、お主のクラスの長谷川君が早退したらしいの。」

ん？ そうなのか？ と、金髪の少女は後ろの女性に話しかける。

「はい。正確には8時25分46秒に教室を後にしています。授業が始まる前ですので早退ではなく欠席が相応しいかと。」

ふーん、と。少女は相槌をうち、次の一手を考え出す。

ただなんとなく確認してみただけで、特に意味は無いらしい。

右手に黒い碁石を持ち、少女にあるまじき椅子の上でスカートに胡

坐姿というあらぬ格好で、左手で頬杖をついたまま盤上を見つめている。

「最近彼女の様子はどうじや？」

少女が碁石を置こうとしたとき。老人がそれを制するように話しかける。

少女は打つのをやめ、訝しげな表情を浮かべ老人を見た。

「やけに気にするじゃないか。何だ？ 何かあるのか？」

ふむ。そう返事とも取れない相槌を一つうつと、老人は碁盤の脇に置いてある湯飲みを取り、一口飲む。

それを見た少女も訝しげな表情のまま喉を濡らす。

その後、学園長室には一時の静寂が訪れた。

「・・・？」

そのまま黙ってしまった老人から視線を外し、少女は後ろの女性と目を合わす。

しかし後ろの女性も首を傾げるのみ。

仕方なく少女は碁の続きを打とうと、改めて盤上に手を伸ばす。

そして黒い碁石が盤上に置かれようかといつとき、老人が口を開いた。

「彼女には、認識障害が効いておらん。」

パチン。

そう音を立て、再度の静寂が訪れた。

「・・・それはさわかし辛いだろうな。」

少女は苦虫を潰したような表情を浮かべ、老人を見る。その目には老人を責める色がありありと浮かんでいた。しかし老人は目を瞑つたまま、ピクリとも動かない。

「（）で認識阻害を受けず、なおかつ関係者じやないなど、悪夢のようなものだ。なるほど、あいつがいつも不機嫌なのはそのせいか。」

会話のボールは老人に渡る。少女は老人を見つめたままその反応を見定めている。

三度の静寂が訪れたまま。少女がお茶を啜る音だけが部屋に響いた。

「・・・ふむ。そもそもそれに気づいたのは小学校低学年の頃じゃ。周りとの見識の違いに苦しんでおったの。」

パキッ

少女の持つ湯のみが悲鳴を上げた。

「それほど前から気づいているなら、なぜ手を打たん？ ジジイなら親の仕事に手を回して麻帆良から追い出すなりなんなり出来るだろ？」「

部屋の気温が下がりだす。窓の内側には露が浮かび、老人の吐く息が白くなる。

少女の持つ湯飲みが碎けるが、中身が飛び散ることはなかった。

「（）の麻帆良から出しても同じじやよ。認識阻害が効かないなら、いつかどこかで巻き込まれる。ならば麻帆良の中にあるほうが良い

と思つたんぢやがの。」

「ハツ、ならば裏の関係者にすれば良い。あのクラスに入れてなし崩し的に関係者になることを期待したか?」

「ふむ。その意思が無いといえば嘘になるの。」

「はつきり言えばいい。知つてほうつておきました、お前のストレスの原因は自分達魔法使いですと。それが言えなくてあのクラスにしたんだろう? 哀れだよ、長谷川が。」

部屋のなかが極寒へと変わる。少女の後ろに控えていた女性が窓を開けようとするも、凍り付いてしまい動かない。

「それを言わると辛いんぢやが・・・。のうエヴァンジエリン、常識とはなんぞや?」

今にも立ち上がるかとしていた少女の機先を制し、老人が話しかける。

勢いを殺がれた少女、エヴァンジエリンはイライラとした様子でそれに答えた。

「そんなもの人それぞれだ。」

老人は急須から改めて湯飲みに茶を注ごうとするも、いくら傾けようとも茶は出てこない。

もう・・・。と、一つ唸り、諦めてエヴァンジエリンに向き直った。

「そう、人それぞれじや。じやが基本的には周りの人、環境によつて形成されるとは思わんか?」

「・・・何が言いたい?」

女性が老人の湯のみと少女の湯のみだったもの、それと急須を持ち

部屋の外へと出て行く。

ある程度部屋の気温は上がってきたようだ。

「確かにわしが気づいたのは小学校低学年のときじゃ。それ以来自分を騙して生きてきたようじゃの。申し訳ないことをしたとは思つておるが・・・。」

そう言つて、一息つく。そして改めてHヴァンジエリンに向き直り、次のような言葉を放つ。

「一体、彼女の常識はどうから来たのかの?」

「・・・は?」

「いや、調べると物心ついたときから彼女の言動は認識阻害が効いていない者のそれじゃった。じやが、彼女はこの麻帆良で育つているんじや。」

「成るほど。つまりこう言いたいわけか。麻帆良で育つたら認識阻害が無くても人が車より早く走るのは当たり前。蟠桃が有名にならないのも当たり前だと、そういう常識になるはずだと。」

「つむ、これが外から来た者なら話が判るんじやが、の。認識阻害はどうやらかとこうと外向けの結界じゃし。」

先ほど出て行つた女性が新しいお茶をもつて部屋へと入つてくる。そして老人とエヴァンジエリンの前に置き、再びHヴァンジエリンの後ろへと控えた。

「おお、すまんの絡繆君。」「いえ。」

そう一言お礼を言い、老人はお茶を一口飲む。そして湯飲みを両手に抱えたまま次の言葉を放つ。

「どうせ腑に落ちんでの。悪いとは思つたじやが静観しておつた。」

「で？ なぜ今更それを言つ？」

「たいした理由ではないよ。そこでじゃ HUGO ANTHONY LINN、ひょりひょりと彼女を調べ。」

「断る。」

「ほつ？」

少女は椅子から立ち上がり、腰に手を当てて湯飲みのお茶を一気に飲み干す。

「私は精神科医でもカウンセラーでも教員でもない、他を当たれ。」

ああ、何かわかつたら結果だけ教えてくれ。

そつ言い残し、HUGO ANTHONY LINNと絡繰は学園長室を後にする。

「ちゅ！ セッかくわしが勝ちそつじやったのに… おーこー！」

むう・・・。行つてしまつた。

そつづふやくと、老人はノロノロと囲碁の道具を片付けだす。

「ひつなると誰が適任かのひ・・・。」

ちつのホームページ、更新されなくなつちやつたしのひ。

そんな呴きが微かに聞こえてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0988ba/>

千雨の夢

2012年1月10日23時51分発行